

5—新 国 語

国 語

(5—新)

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、17 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるものは、各問のＡ・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 山肌に地層が露呈している。
- (2) 寸法に合わせて布地を裁つ。
- (3) 訓練のためにサイレンを吹鳴する。
- (4) 全国に救援物資を通送する体制を整える。
- (5) 学校の伝統はレンメンと受け継がれている。
- (6) 世界経済は安定したままショウコウを保っている。
- (7) 合図と同時にイチモクサンに走り出した。
- (8) 思春期では理性と感情がニリツハイハンすることは珍しくない。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

大手プロダクションでレッスンを受ける十六歳のミチルと十四歳の真由は、マネージャーの桐絵と共に歌番組の見学をしていたところ、リハーサルに間に合わない人気デュオ、ピンクィガールズの代わりにステージに立つよう頼まれる。

いきなり何を言いだしてくれるのだ、と桐絵は震えた。これはあくまでもリハーサルだし、舞台に立つのはオケやカメラが一応の感覚をつかむためであって、実際にテレビに映るわけではない。が、真由もミチルも、まだまだ未熟もいいところなのだ。人前で、しかも名だたる歌手たちのそばにいる前で、歌を披露できるような状態にはない。

「城田さん、あの……。」

桐絵は舞台を見上げて言った。つい、懇願するような口調になってしまふ。

「お気持ちはいりますが、さすがにこの子たちはまだ、」

「お気持ち？ 何をばかなこと言ってるの。」

ぴしゃりと遮られた。

「あなたたちのためなんかじゃないわよ。後学のために見学させて頂いてるんなら、隅っこに突っ立ってるだけじゃなくて、ちょっとくらい番組のために協力しなさいって言ってるの。」

桐絵の隣で、真由がごくりと唾を飲みこむ。その向こう側に立つミチルもまた緊迫の面持ちだ。

「よし、わかった。じゃあ、そこのお二人さんに頼むとしよう。ちょっと待って。」

プロデューサーが言い、また城田万里子との打ち合わせに戻る。

(1) やがて万里子が下手へ去り、次の歌手が現れて歌いだす間に、桐絵はまず自分の気持ちを鎮めようと必死になって深呼吸をした。

こんな時に限って峰岸がいない。何かと腹の立つ上司だが、ふだんからけつこう頼ってしまっていることを思い知らされる。

「どうしよう。」

真由がするような目を向けてくる。

「ねえ、どうする？　どうすればいいの？」

犬猿の仲のはずのミチルにまで話しかける。めずらしく素直だ。

下唇をぎゅつと噛みしめていたミチルが、そちらを見て、次に桐絵を見た。

やがて、低い声で言った。

「やるしか、なか。」

「ミチル。」

「うん。こうなったら、うちらがやるしかなくなるもん。大丈夫、リハールサルやる？　テレビに出るわけやないけん。」

後半は真由に向かって言い切る。

そうこうするうちに、出番が来てしまったようだ。

「さて、その二人。こっちへ上がってきてもらおうか。」プロデューサーが手招きする。「大丈夫、取って食いやしないよ。」

声と口調は優しい。まだ十代半ばの少女たちを相手に、子どもをあやすように笑いかけてくれる。

「二人とも、ピンキーガールズの歌は知ってるだろ？　オケの演奏に合わせて、適当に歌ったりリズム取ったりしてくれたらそれでいいから。」

——さあ、ほら、急いで。」

急いで、の言葉に、桐絵の身体は反応した。番組プロデューサーが急げと言ったら、それは絶対なのだ。出演者一人ひとりの都合など二の次だ。

印を剥がすのだろうが、もし放送開始後の到着となった場合は貼ったまままだ。

こういうことはしょっちゅう起こる。桐絵自身、様々なタレントたちを送迎する中で何度も遭遇した。マネージャーや付き人がいる以上、タレント自身の理由による遅刻はむしろ稀で、たいていは前の番組が押したり道路が渋滞していたりといった事情なのだが、一緒に移動しているところらまで胃に穴が空きそうになる。

息せき切って局や会場へ駆けつけ、ぶっつけ本番でステージ上へ出ていつて、目の端でバミリを確認しながら最高のパフォーマンスを見せる歌手たち。

その姿を目にするたび、ああ、かなわない、と思う。年齢も性別も関係ない。何があっても尻込みすることなくスポットライトの真下へ出てゆけるという時点で、彼らはまぎれもなくスターなのだ。

マイクが二本、真由とミチルのそれぞれに手渡される。

プロデューサーがオケのほうをふり向いた。

「じゃあ、高尾先生！　お願いしますよ。」

先程から、真由とミチルを眺めながらずっとここにこしていた高尾が、二人に向かって人差し指を振った。

「きみたち、並び順はそれでいいのかな。」

え、と二人がまた顔を見合わせる。

「逆のほうがいいと思うよ。」

(3) 真由とミチルが、きょとんとした顔で、言われたとおり入れ替わる。

「よし、始めよう。」高尾はおごそかに言った。「うまく歌おうなんて思わなくていいからね。ただ、できるだけ振りもつけて思いっきり歌ってくれと、僕らもカメラさんも、みんなが助かる。頼んだよ。」

オケのほうへ向き直った高尾が、スッとタクトを振り上げる。振り下ろすと同時に、耳に馴染んだヒット曲のイントロが流れだした。

(2) 思いきって、真由とミチルの背中を押す。

「さ、行きなさい。」

「桐絵さん……。」

「そうよ、大丈夫。あんたたち、ピンキーガールズの大ファンでしょ。こんなやつて最高の機会じゃないの。せっかくだもの、うんと楽しんでおいで。」

真由とミチルが、目と目を見交わす。この緊急事態の前に、初めて協力する気になったようだ。かすかに頷き合って、真由、ミチルの順に袖の階段を上がり、プロデューサーに手招きされるままステージ中央に並んで立つ。

まぶしいスポットライトの下、見た目の印象も、服装も、まったく違う二人が並ぶのを、桐絵は固唾を呑んで見つめた。勇ましいことを言って送り出したものの、今にも心臓が止まりそうだ。

こうなると、舞台の奥でオケの指揮をするのが、ふだんから馴染みの高尾良晃であることがたまらなくありがたい。祈る思いで見上げる桐絵の視線を受け止めて、高尾が頷いてよこす。かすかに笑ったようだ。

観客席から向かって右の上手側に真由、下手側にミチルが立っている。中学生にしては背の高い真由と、高校生にしてはやや小柄なミチルとで、見た目にはちょうどバランスが取れている。

「もうちょつと、こっちへ寄ってくれかな。はい、そこでオッケー。」

二人に指図しながら、プロデューサーが袖へと呼びかけた。

「おい、ここバミッとけ！」

若いディレクターがビニールテープを手で飛んできて、二人の立っている足もとの床に小さい×印を貼りつける。

カメラに映りにくく、観客から見えにくいその印は「バミリ」と呼ばれる。場を見る、からきた言葉かもしれない。生放送の開始より前にピンキーガールズが到着したら、立ち位置だけ確認してもらった上で×

マイクを握った二人ともが、緊張の面持ちで、けれど少しはにかみながら踊り出す。

桐絵は、目を瞠った。まるでこの日のために練習してきたかのようなステップも、手の動きも、振り付けを忠実になぞっている。

さらには歌いだしたとたん、周囲からどよめきと歓声が上がった。上のパートが真由、下がミチル、迷いもなく二声に分かれている。完璧なハーモニーと言っている。

ピンキーガールズの二人のうち、観客席から見えて左がユウ、右がマイ。マイのほうが低いパートを歌う。この並び順でなければ、真由もミチルも、こうまで迷いもなく自分の声に合ったパートを歌うことはできなかったはずだ。桐絵は舌を巻いた。高尾がわざわざ立ち位置を入れ替わらせたのはこのためか。

互いにタイミングをはかろうと、二人ともマイク越しに何度も目と目を見交わす。周りの歓声が届くたび、緊張がほぐれて笑みがこぼれ出す。サビまで含めてワンコーラスが終わり、どちらもが名残惜しそうにマイクを持つ手を下ろしかけたのに、なんと、オケはそのまま続けて間奏を奏で始めた。(4) おおー、と拍手が沸く中、高尾がニヤリとこちらをふり返り、戸惑う二人に向かって顎をしゃくってよこす。

はつきりと視線を交わし合った真由とミチルが、笑み崩れながら二番を歌い始めた。

信じがたい光景を、桐絵は息を呑んで見つめていた。まさかあの二人が——犬と猿とまで言われた真由とミチルが、ともに笑顔で歌って踊る場面がめぐってこようとは。

こんな奇跡のような出来事はもう二度と起こらない。後にも先にもこれっきりだ。間が悪いのか何とのか、どうしてこういう時に限って峰岸はいないのか。あの尊大な男がこれを見たらどれほどびつくりしたことか、口をぽかんと開けてステージを見上げる横顔までありあ

りと思い浮かんで、桐絵は、実際にそれを見られなかったことが悔しくてたまらなかった。

とうとう二番のサビまで完璧に歌い終えた少女たちが、演奏終了に合わせてぴたりとポーズを決めたたん、周りから今日一番の拍手が湧き起こった。はにかみながら四方へお辞儀をする二人に、すごいすごい、良かったよ、とねぎらいの声も飛ぶ。

「ニクいねえ、高尾先生。フルコーラスのサービスとはこれまた。」

⁽⁵⁾ プロデューサーが苦笑いしながらオケをふり向く。

「だって、きみたちも見なかったろう？ 途中で止めたりしたらきつと大ブーイングだ。」

指揮棒を手にした高尾が身体からだを揺らして笑った。

「二人とも、ご苦労さんだったね。素晴らしいパフォーマンスだった。」

上気した頬の二人がそれぞれに強く頷いて、頭を下げる。

「ありがとうございました！」

「はい、お疲れさん。」

もう下がっているよ、とプロデューサーに言われて舞台袖の階段を下りてくる真由とミチルを、桐絵は両腕を大きく広げて迎えた。

「素晴らしかったわよ、あなたたち！」

「ほんと？」

とミチル。

「もちろんよ。二人とも、最高に光り輝いてた。見てて涙が出ちゃった。」

「何それ、親戚のオバサンじゃあるまいし。」

さっそく憎まれ口を叩くたた真由も、そのじつ、晴れがましさを隠しきれずに小鼻がびくびくしている。

同じ代役でも、他の歌手の代わりでは決してこうはいかなかった。二人ともが筋金入りのピンキーガールズ・ファンだからこそ、歌のパートも振り付けも完璧に覚えていて、皆の前で堂々と披露することができた

のだ。

「あなたたちこそ、どうだった？」二人を見比べながら、桐絵は訊いた。

「スポットライトを浴びてみた感想は？」

「楽しかった！」

と真由。

「もう、最高！」

とミチル。

⁽⁶⁾ 満面の笑みのまま隣に立つ相手を見やったかと思うと、慌てたように表情を引っこめて、ぶいっと顔を背ける。

ふだんでも、せめてこれくらい距離感でいてくれたらいいのに、と桐絵は思った。仲良くなれとは言わない。ただ、つかかったり煽あおったり、無視したり仏頂面ぶつちやうめんでいるのをやめて、お互いの才能を認めた上で良いライバルになれたらいいに。

(村山由佳「星屑」による)

〔注〕 オケ——オーケストラの略。

城田さん——ミチルと真由が所属するプロダクションの大物演歌歌手。

〔問1〕⁽¹⁾ やがて万里子が下手へ去り、次の歌手が現れて歌いだす間に、

桐絵はまず自分の気持ちを鎮めようと必死になって深呼吸をした。とあるが、桐絵が「自分の気持ちを鎮めよう」としたわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 思いがけない事態に緊張してしまっていたが、二人にとつての大きなチャンスと受け止めて最大限利用しようと考えたから。

イ 城田は真由とミチルの未熟さを知らないが、二人の状態を理解している自分は恥をかく覚悟をしなければならぬと考えたから。

ウ 大事な時に上司の峰岸がいらないことを腹立たしく思ったが、結局頼れるのは峰岸だけなので怒りを抑えようと考えたから。

エ 突然の出来事に対して動揺しているが、真由とミチルのためにもマネージャーとして自分が冷静である必要があると考えたから。

〔問2〕⁽²⁾ 思いきって、真由とミチルの背中を押す。とあるが、このときの桐絵の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 日ごろ反目している二人に大きな不安を抱えているが、迷っている場合ではないことを自覚してあえて力強く二人を励ます気持ち。

イ 緊張感のある苦しい状況ではあるが、困難を乗り越えることでスターへの第一歩を踏み出せると二人に期待する気持ち。

ウ 初めての経験ではあるが才能がある二人なので、ステージを楽しむことさえできれば問題ないと自信を深めている気持ち。

エ 才能があると思っっている二人をプロデューサーが子ども扱いしているので、なんとか見返してやりたいと意気込む気持ち。

〔問3〕⁽³⁾ 真由とミチルが、きょとんとした顔で、言われたとおり入れ替わる。とあるが、この表現から読み取れる真由とミチルの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分たちでも気になっていたことをはっきり言われたので、納得して行動する様子。

イ 突然指を差されて言われたので慌ててしまい、間が抜けた表情で行動する様子。

ウ なぜ入れ替わるのか理由はわからないが、とりあえず指示のままに行動する様子。

エ 予想外に厳しい口調で指摘されて、反感を持ちながらも仕方なく行動する様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ おおー、と拍手が沸く中、高尾がニヤリとこちらをふり返し、戸惑う二人に向かつて顎をしゃくつてよこす。とあるが、この表現から読み取れる高尾の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 真由とミチルを心配して助力を願っていた桐絵の期待に応えられたことと、新しいスターが誕生する場面に立ち会えたことに、大きな喜びを表している。

イ 歌と踊りと演奏が一体化したステージに手応えを感じ、もっと周囲の反応を引き出そうと考えて、ふだんはいがみ合っている二人に協力するよう命じている。

ウ 真由とミチルなら代役を十分に果たせるとの予想が的中し、自分の助言も的確であったことに満足して、ためらうことなくこのまま続けて歌うよう促している。

エ 代役として期待していなかった二人の活躍を褒めるとともに、オーケストラに合図を送って、フルコーラスを歌う機会を与えることで感謝の念を示そうとしている。

〔問7〕 本文の内容や表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 桐絵以外の登場人物の心情の変化を詳細に描くことは避けて、桐絵からの視点に限定して描写することで、人間関係がはっきりと見えるようになっている。

イ 「！」や「？」を用いることで感情の変化が明確になっており、特に桐絵の繊細な心情の移り変わりと、真由とミチルの複雑な感情が読み取りやすくなっている。

ウ スポットライトを浴びる人たちとそれを裏で支える人たちとを対比して描き、ステージがどうやって創られるかということを、解説するように読者に伝えている。

エ 桐絵の心理描写を中心にストーリーが進行されているが、多くの登場人物の会話を取り入れることで、それぞれの人物の思いが的確に表現されている。

〔問5〕⁽⁵⁾ プロデューサーが苦笑いしながらオケをふり向く。とあるが、このときのプロデューサーの気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 真由とミチルに大きな期待は持っていなかったが、二人の才能を踏まえて行動した高尾に感心する気持ちになっている。

イ 城田の言葉に従って真由とミチルに経験を積ませようと考えたが、二人の予想以上の才能に驚きの気持ちを感じている。

ウ 全く期待していなかった二人の歌唱力の高さに驚きつつも、周囲の人たちが送る賛辞の大きさに戸惑いの気持ちを感じている。

エ 二人はあくまでリハーサル of 代役に過ぎないのに、わざわざフルコーラスを演奏した高尾にあきれる気持ちになっている。

〔問6〕⁽⁶⁾ 満面の笑みのまま隣に立つ相手を見やったかと思うと、慌てたように表情を引っこめて、ぶいっと顔を背ける。とあるが、この表現から読み取れる真由とミチルの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 歌っている間は相手への不信感を隠して笑顔でいられたが、互いの顔を見ると抑えきれずに態度に表れている。

イ 日ごろ反発している相手といつの間にか協力して歌っていたことに今さら気が付いて、互いに相手を意識している。

ウ 納得のいくパフォーマンスができたのはすべて相手のお陰だと感謝の念を抱いたが、照れくささを感じて素直になれないでいる。

エ 練習の成果を周囲の人たちに認めてもらえたことを喜びつつも、自分一人でもやれると互いに相手を邪魔に思っている。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

イギリスの著名な物理学者であるゴールドが*アインシュタインと会見する機会があったとき、自分では気に入って自信のある方程式を彼に示して、「どう思われますか？」と問うた。⁽¹⁾アインシュタインは方程式を眺めてしばらく沈黙した後、「なんとまあ汚い」と述べたのみであつたという。アインシュタインの物理観は、理論は多くの状況に対応し得る普遍性を含んでいる上に、簡潔に表現されていなければならないというものであり、前者は満たしていたが、後者の審美眼の基準には合格しなかったのである。

これはアインシュタインだけでなく、すべての物理学者が共有している理論の良否の判断基準であり、数少ない仮説の下で／可能な限り簡潔な表現で／普遍的な意味を内包する理論、そんな理論こそが最高であると考えている。これを「オッカムの剃刀」^{*}と言う。それはその理論の真实性（真贋）を保証しているのではないけれど、「普遍にして簡潔」という基準を満たさなければ真実に遠いと思ってしまうのだ。実際、自分が考案した長々とした方程式について、自分ながら正しいと思えなかったという経験がある。自然はムダをしない、自然は節約をする、自然は饒舌^{じょうぜつ}ではない、自然は単純を好む、という「オッカムの剃刀」の判断基準（精神）を正しいとする感覚が働いているためで、その感覚が正しいという先見の理由はないが、やはり真実はそういうものだろうと思ってしまう。

実際、これまでの物理学の歴史はその感覚が当を得ていることを証明してきた。最小作用の原理は、自然は作用が最小となる経路を採るとする原理であり、古典力学や量子力学はこれに従って組み立てられている。なぜ、この原理を採用すべきか証明できないのだが、物理学の指導原理

として正しいことを認めざるを得ない。最も単純で簡明であるからこそ、最も多様な展開が可能となるのだらうか。

私たちが「オッカムの剃刀」と言っているのは、自然は虚飾を好まないという単純化の原理のことであり、これまでに成功してきた理論の基本方程式の美しさとして表現されていると言えるかもしれない。ここで「美しさ」という、論理的ではなく感性的な言葉を使ったが、人間は美しいものを見ると楽しさを感じるものである。だから、提案された理論を物理学者が見て、直感的に「これはホンモノだな」とか「これはウソ臭いな」と判断するのは、それを見て楽しさを感じるかどうかなのではないかと思う。その感覚こそ物理学者に共通する理論への審美眼の一種であり、まだ詳細を調べていないにもかかわらず、概ね真実を穿^{うが}っていることを多く経験している。なぜ、そうなのか直ちには説明できないが、審美眼（美的感覚）は物理の本質を見抜く重要な要素なのである。

論文を読んでいううちに、論理に矛盾や飛躍があつて整合的でないとか、些細な部分だが実験事実との食い違いに気づくとか、結論が飛躍している、とかを総合判断するうちにその論文の優劣の理由が明らかになってくる。科学は、出発点である直感の意外性、理論を組み上げる論理性、導かれる結論の強固性の三つが揃^{そろ}って初めて楽しむことができ、それらを満足させないと安心できないのである。逆に言えば、三つの要素が簡潔に表現された論文には美を感じ、要点だけを抜き出したコンパクトな数学的記述を見ると、それだけで科学的真実が記述されていると思ってしまうのだ。

物理学者誰もが一致して美しいと推薦するだろう方程式を挙げておこう。

ニュートンの運動方程式 熱力学第一法則（熱エネルギー保存則）
マクスウェルの電磁場方程式 アインシュタインの一般相対性理論

演繹法とは、自らが普遍的と考える前提（原理、仮説）から出発し、論理を合理的に正しく展開することを通じて、最終的に特殊な結果（自然現象、実験や計算結果）に到達するという理論家が採用する思考法で、数学の証明がその典型である。キャッチフレーズ風に言えば「普遍から特殊へ」となる。アリストテレスが、誰もが承認する公理から出発して現実が生じている諸現象を解釈したことに起源がある。アインシュタインの特殊・一般の二つの相対性理論は、原理と論理の組み立てのみで創り上げた純粹に演繹的方法の産物と言われている。誰もが承認する前提と厳密な論理から得られる結果だから、その結論は承認せざるを得ないわけである。

と言つても、その前提（採用した原理や仮説）が正しいということは必ずしも保証されていない。その多くはこれまでの経験事実と合致しており、それを否定する明確な理由がないから受け入れているだけで、絶対確実というわけではない。私たちの経験はあくまで部分であり、すべてを知り尽くしているわけではないからだ。また、「あらまほしい」とか「あるはずの」とか「あるべき」というような命題が前提の場合には、それをあからさまに否定できないので、うかうかすると導かれる結論までそのまま受け入れざるを得なくなるから用心が必要である。他に「神の摂理」とか「自然の理法」などを前提とされてはどんな結論でも導き出すことができるので、科学で使うべき論法ではない。あるいは説明すべき結果をすでに知っていて、前提に合った現象のみを導き出している可能性もある。³⁾ 以上のように、演繹法に対して注意すべき点がいくつもあつて用心すべきであると言っておきたい。

アリストテレスの演繹法は、目的論（自然はその目的を実現するよう秩序立てられているとする立場）で結果と前提が反転していることが多い。例えば、アリストテレスは重い石ほど速く落ちることの説明のために、地球は重い石を好むという前提を置き、それ故重いほど強く引きつ

シュレジンガー方程式 ディラックの相対論的電子の方程式
ボルツマン方程式 フォッカー・プランク方程式

いずれも、物理量の時空間における振る舞いを記述しており、余分なものが剥ぎ取られ簡潔にして要なのである。時間についての初期条件と空間についての境界条件を変えることで、実に多様な現象に適用できる。むろん、適用範囲が広いからこれらの方程式が重要と見做し、それ故に美しいと誤認している可能性も否定できない。私たちは、多くの役に立てば立つほど愛おしく思い、そのパフォーマンスの多様さを美と解釈してしまう癖があるからだ。大杉栄は「美はただ乱調にある。諧調は偽りである」と言つたそうだが、方程式の美は「ただ諧調にある」のである。

物理学者なら誰しもが、自分の名前が付くような方程式を発見したいと望んでいるが、それはほんの限られた天才以外には不可能である。²⁾ だから、凡庸な私たちは、偉大な方程式をさまざまな現象に適用して、その美をさらに磨き上げるほんの一助をするのがせめてもの役割なのだらう。

科学とは、一方で「自然が見せる多様な現象」があり、他方で「現象を過不足無く説明できる原理や法則」があつて、この二つをいかに整合的に結び付けるかについての人間の知的営みと言えるだろう。端的に言えば、「自然現象」と「説明原理」との関係のことで、それを明快に結び付けた言説のことを便宜上「真実」と呼んでいるのである。

その科学の営みには二つの方法があり、一つは「説明原理」から「自然現象」を導く演繹法、もう一つは逆の「自然現象」から「説明原理」へと遡る帰納法である。一般に人間はどちらか一方の思考法を得意としており、科学者個々人はその性格に応じていずれかの方法を採用している。

けるからとした。あたかも地球に好悪の意志があるかのような前提だが、誰も否定できない。それを疑つたのがガリレオで、彼は重いレンガと軽いレンガを用意し、重いレンガが軽いレンガより速く落ちるなら、二つをヒモで結んで落としたらどうなるかという問題を出した。より重くなるのだからより速く落ちると答えるかもしれないが、遅く落ちる軽いレンガを結び付けたのだからブレーキがかかつて遅くなるのではないかと問い返したのである。アリストテレスの前提では、どちらが正しいか答えられない。そこでガリレオは、地球は物体の重さに好悪を持たないはずで、すべての物体は同じ速さで落ちるはずなのだが、空気の抵抗で落下の遅速の差が生じると考えるべきだ、と主張したのであつた。

演繹法で採用する前提（原理）を、より一般的なものへと拡張していくことにより、より多様な現象が統一的に捉えられることを、ガリレオの相対性原理から、特殊相対性原理を経て一般相対性原理への拡張に見ることができ。このように、より広い概念へと拡張すれば、より斉一的に自然を捉えられるという科学の発展から、科学は常に進化途上にあると言える。⁴⁾ 最終理論は永遠に得られないのである。

もう一つの科学の方法である帰納法は、主として実験・観測的分野で採用されている方法で、個々の特殊で具体的な事象の共通性と異質性を弁別する中で、普遍的な法則や命題や原理を導き出そうとする思考法である。これをキャッチフレーズ風に言えば「特殊から普遍に至る」ということになる。変わった動物・植物・鉱物などのサンプルを多数蒐集して標本とし、共通する性質で分類するという博物学に起源がある。科学革命が進行し始める中で、与えられた条件下での現象の観測・観察に止まらず、環境条件を自ら設定して自然を振る舞わせる実験へと一歩進めた^{*} フランシス・ベーコンが帰納法を提唱したと言われる。

具体的な自然を相手にした実験・観測によって得られた事実を足場にしているのだから、その実在性については疑いはない。演繹法のように

架空の前提から出発していないだけに、具体的に確実な自然の一部を捉えているという側面で強みがある。より包括的な法則が発見されれば過去の理論は意味がなくなってしまうが、実験で得られた事実（個々の成果）は現象のほんの一部であっても意味を失わない。そして、得られた現象の特徴を整理して普遍化（一般化）させるという手続きを経るから信用度が高い。寺田寅彦はそのことを強調しており、そんな想いで実験家になった研究者は多くいる。

しかしながら、やはり人が行う実験や観測は部分に過ぎず、物理量の考え得る全領域を調べ尽くせるわけではない。異なった状況設定、異なった物理環境、異なった手順、異なった観点、異なった手法、についてすべて完璧に確かめられるわけではない。また、手に入る試料も実験の手段・手法や精度も時代に制約されている。従って、得られた実験結果は部分でしかなく、それを集大成して創り上げた理論も自然のすべてを検証したとは断言できない。部分の現象から得られた法則から、必ず普遍的に適用可能な原理に到達できると断言できる者は果たしているだろうか。

例えば、通常の化学反応実験では左右（左手系と右手系）の対称性を持ったものが同数できてしまうのだが、二〇〇一年のノーベル化学賞ではどちらか一方だけしかできない方法の発見に対して授与された。その方法には酸化法と還元法（日本の野依博士は還元法）があって、それぞれ応用範囲が限られる。その有効性は疑うべくもないが、より簡便であり安価であり応用範囲が広い方法はまだ別にあるかもしれない。現象から原理への道は多くあるのだ。二〇一〇年のノーベル化学賞では炭素同士の効率よく結合させるクロスカップリング法に授与されたが、根岸氏はパラジウムを使って成功し、鈴木氏はホウ素を使ってより応用範囲が広く実用化しやすい方法に改良した。以上のような例から、自然はまだまだ奥深い謎を秘めていて、帰納的方法は私たちの行為が部分に過ぎない

〔問1〕⁽¹⁾ アインシュタインは方程式を眺めてしばらく沈黙した後、「な

んとまあ汚い」と述べたのみであったという。とあるが、アインシュタインは「方程式」をどのように評価したと筆者は考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 自分が気に入っているだけの自己満足でしかなく、さまざまな状況に対応できる汎用性がない。
- イ 普遍性は備えているかもしれないが簡潔さに欠けていて、科学的真実を表したものとは思えない。
- ウ 単純を好む自然のあり方に沿ってはいるが、簡略化しすぎて自然の真実から離れてしまっている。
- エ 多様な現象に適用できる可能性を持っているが、整合性に欠ける点があつて未完成なものである。

〔問2〕⁽²⁾ だから、凡庸な私たちは、偉大な方程式をさまざまな現象に適用して、その美をさらに磨き上げるほんの一助をするのがせめて

もの役割なのだろう。とあるが、「偉大な方程式をさまざまな現象に適用して、その美をさらに磨き上げる」とはどういうことか。五十文字以上六十文字以内で説明せよ。

いことを意識させてくれている。

以上、演繹法・帰納法のいずれも、人間の認識に限界があることを物語っており、「科学ですべてを知り尽くせる」と傲慢になつてはいけな

いと警告を発していると言えよう。おそらく科学者自身がそのような

限界を一番よく知っているはずなのだが、ときに「何でも知っている」

かのように振る舞う科学者にお目にかかつて文句を言いたくなる。人々

も科学の限界をよく心得、科学者や科学の成果を見る目を養う必要があ

ることを強調しておきたい。

〔注〕アインシュタイン——ドイツ生まれの物理学者。一九二一年、

オッカム——十四世紀のイギリスの哲学者・神学者。

大杉栄——二十世紀初頭の日本の思想家。

アリストテレス——古代ギリシアの哲学者。

ガリレオ——十六世紀から十七世紀のイタリアの物理学者・

フランシス・ベーコン——十六世紀から十七世紀のイギリス

の哲学者。

寺田寅彦——十九世紀から二十世紀の日本の物理学者。

野依博士——野依良治。日本の化学者。

根岸氏——根岸英一。日本の化学者。

鈴木氏——鈴木章。日本の化学者。

〔問3〕⁽³⁾ 以上のように、演繹法に対して注意すべき点がいくつもあつて

用心すべきであると言っておきたい。とあるが、筆者が述べている「演繹法に対して注意すべき点」として適切でないものを、次のうちから選べ。

- ア 人智を離れた「神の摂理」などを前提にすると、科学的ではなくなつてしまうという点。
- イ 前提となる原理や仮説の正しさは経験的なものであつて、絶対ではないという点。
- ウ 具体的な事象の分析を丁寧に積み重ねなければ、普遍的な原理に達することができないという点。
- エ 前提に合つた結果ばかりを準備しておく、前提が持つ普遍性が保たれなくなるという点。

〔問4〕最終理論は永遠に得られないのである。とあるが、筆者がこの

ように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 科学の発展とは、採用する前提をより一般的なものへと拡張することを通して、自然を齊一なものとして定義することであり、無限に広がる自然を完全に理解することは、現実的に不可能だから。

イ 科学の発展とは、前提となる原理をさらに広い概念へと拡張することとで、より多様な現象が統一的に捉えられることであり、奥深い謎に満ちた自然に対して、科学は常に進化途上にあると言えるから。

ウ 自然が見せる多様な現象は、現象を過不足無く説明できる原理や法則と結び付き、科学的真実と認められるようになるので、新たな実験や観測が行われる限り、科学的方法是は増え続けるから。

エ 自然が見せる多様な現象は、これまでの経験事実と合致したものであるが、私たちの経験はあくまで部分なので、自然を網羅的に捉えることはできず、包括的な法則を発見することができないから。

4 次 次 の 文 章 を 読 ん で 、 あ と の 各 問 に 答 え よ 。 （ ＊ 印 の 付 い て い る 言 葉 に は 、 本 文 の あ と に 〔 注 〕 が あ る 。 ）

『枕草子』は、「冬は、いみじう寒き。夏は、世に知らず暑き」（第一四段「冬は」と言っているように、厳寒と酷暑がお気に入りだった。このうち冬についての諸段は『源氏物語』に影響を与えたとされている。光源氏が元斎院・朝顔の姫君への積年の思いを終わらせる「朝顔」巻、光源氏は自邸にいて、庭の雪景色を見るために「御簾巻き上げさせ給ふ」。南北朝期の『源氏物語』注釈書『河海抄』はここに注を付け、参考とすべき例として、いわゆる「香炉峰の雪」の場面（第二八〇段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」で清少納言が御簾を掲げたことを挙げている。

それだけではない。この場面で光源氏は冬の夜の澄みきった月と雪の光り合う様子を愛で、それを「すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ（雪と月を不釣り合いなものの例と言いつ残した人の浅はかさよ）」と言っている。誰かさんは雪と月を合わないと言ったが、そのセンスはうすつぺらいと批判したのである。ここにまた『河海抄』は注を付け、「清少納言枕草子」と記している。さらに『河海抄』から遡り鎌倉時代の『源氏物語』注釈書である『紫明抄』は、「清少納言枕草子云はく、すさまじき物、師走の月夜」と記している。つまり、雪と月が合わないと言ったのは『枕草子』であり、紫式部は清少納言のセンスの底の浅さを、光源氏の科白によって批判しているのだと言うのである。残念なことに、現存する『枕草子』諸本の「すさまじきもの」には「師走の月夜」に触れた本文が見当たらない。が、『枕草子』には様々な本があったと伝えられているので、中世頃にはそうした本文を携えた本が存在したのかもしれない。とすれば注釈書たちが示唆するとおり、紫式部は『枕草子』を熟読し、その美意識を超えようとして「朝顔」巻の場面

〔問5〕本文中の記述として正しいものを、次のうちから選べ。

ア 物理学者に共通する理論への審美眼に「オッカムの剃刀」と呼ばれるものがある。美しく楽しさを感じさせる理論は簡潔で、虚飾を拒絶する自然の普遍的な真理を科学的に保証している。

イ 科学とは「自然が見せる多様な現象」と「現象を過不足無く説明できる原理や法則」とを適切に対応させる知的作業である。両者の結び付きが強固なものを、絶対的な科学的真実と呼んでいる。

ウ 演繹法と帰納法はどちらも「自然現象」と「説明原理」を結び付ける思考法である。しかし思考の順序が違っているので、対象によってどちらかの方法を選ぶ必要がある。

エ いかなる論理的方法を用いても自然を把握しきすることは不可能である。科学は万能ではないことを理解し、自然の奥深さと謙虚に向き合っていくことが大切だ。

〔問6〕⁽⁵⁾ 以上、演繹法・帰納法のいずれも、人間の認識に限界があることを物語っており、「科学ですべてを知り尽くせる」と傲慢になつてはいけなとの警告を発していると言えよう。とあるが、『科学ですべてを知り尽くせる』と傲慢になつてはいけない」ということについてあなたはどのように考えるか。本文の内容を踏まえ、あなた自身の経験や見聞を含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

を作ったのかもしれない。

ただ、もしそれが当たっていたとするならば、『枕草子』の次の章段をどう理解すればよいのだろうか。雪と月を不釣り合いと言っているはずの『枕草子』が、ここでは月夜の雪景色をことのほか美しいものとして記しているのである。

屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠して、有明の月の隈なきに、いみじうをかし。白銀などを葺きたるやうなるに、水晶の瀧など言はましやうにて、長く短く、ことさらにかけ渡したると見えて、言ふにも余りてめでたきに、下簾もかけぬ車の、簾をいと高う上げたれば、奥までさし入りたる月に、薄色、白き、紅梅など、七つ八つばかり着たる上に、濃き衣のいと鮮やかなるつやなど月に映えてをかしう見ゆる傍らに、葡萄染の固紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など着こぼして、直衣のいと白き、紐を解きたればぬぎ垂れられていみじうこぼれ出でたり。

（建物の上は一面真っ白で、粗末な家々もみな雪化粧に隠れ、有明の月に皓皓と照らされて息をのむほど素敵だ。銀の瓦で葺いたような屋根から、水晶の滝とでも言いたくなる氷柱が長く短く、まるで技巧を凝らして並べ下げたようで言葉にもできない美しさだ。そこへ下簾も掛けない牛車（ぎし）が一台、御簾をうんと高く上げてあるので奥まで差し込んだ月光に、中の女の装束が照らされている。薄紫、白、紅梅など七、八枚ほど重ねた上に、濃紫の鮮やかな光沢が月に映えて素敵だ。そして彼女の傍らには男が、葡萄染めの固紋の指貫に何枚もの白い単衣を着こみ、山吹や紅の衣を直衣の裾から着こぼして、真っ白な直衣は紐をほどいているのでしどけなく肩に掛かり、下の衣が覗いている）

（『枕草子』第二八三段「十二月二十四日、宮の御仏名の」

雪の明け方、牛車でのデート風景である。屋根も氷柱も月光も白一色の世界。そこへ恋人たちを乗せた車が一台、大胆にも車内のカーテンにあたる下簾も掛けず、御簾も「いと高う上げ」ていて、中の男女の装束の色が白銀の世界に映える。

⁽¹⁾ 紫式部はこの章段を見落としていたのだろうか。ならば『枕草子』を批判したのは早計で、紫式部のミスだったことになる。あるいはこうした章段もあると知ってはいたが無視を決め込んだのだろうか。とすればそれは、あまりに不当で、むしろ不自然なことではないだろうか。

ここには、全く別の可能性が考えられないか。『枕草子』と『源氏物語』では、『枕草子』のほうが時代的に先行する作品だと見られがちだが、詳細にはどうだろう。『枕草子』の当の第二八三段について見れば、執筆の時期を特定する手がかりはなく、『枕草子』全体の成立について言われる長徳二（九九六）年から寛弘年間（一〇一二年まで）頃までの間に書かれたという以外、わからない。一方『源氏物語』も、寛弘二（一〇〇五）年に紫式部が中宮彰子に出仕する少し前から世に出回り始め、その後も書き継がれたと知られるばかりで、「朝顔」巻の執筆の時期はわからない。むしろ確実なのは、二つの作品には、両方が並んで書かれた時期があったということだ。またどちらも、断続的に書いては公表するかたちをとっていた可能性がすこぶる高い。とすれば、『枕草子』を受けて『源氏物語』が書かれただけではなく、『源氏物語』の言葉に触発されて『枕草子』が応えたという可能性も否定できない。

順序立てて推測してみよう。まず『河海抄』や『紫明抄』の言うところ、清少納言が『枕草子』のある本の「すさまじきもの」に「師走の月夜」と記していたとする。それを見た紫式部は、『源氏物語』『朝顔』巻で光源氏に反論を吐かせた。⁽²⁾ 清少納言はそれを読み、なるほど納得して『枕草子』第二八三段を書いた。二人は互いの作品を読み合い、美意

雪と月で一面真っ白な庭に、少女たちが着こむ装束の色が生き生きとした優雅さを添える。黒髪がまた、くつきりと鮮やかに目を射る。との色の対比という点で、この場面は『枕草子』第二八三段とを共有していると言つてよい。

紫式部と清少納言といえは、『紫式部日記』の記す感情的な記事がどうしても表に立ってしまう。しかし作品の中では、対抗し高め合う、いわば切磋琢磨の関係もあったのではないだろうか。月下の雪景色という美景を、『源氏物語』は『枕草子』を超えようとして考案し、『枕草子』はその『源氏物語』を受け入れて、新しい美の境地に至った。⁽⁴⁾ その考えは、二人の才女と二つの作品の関係について、これまでにない新しい見方を拓くことだろう。そしてこの見方こそが豊かな発見を秘めているように思うのだが、どうだろうか。

（山本淳子「枕草子のたくらみ」による）

〔注〕 齋院——京都の賀茂神社に奉仕した皇女。
御簾——すだれ。部屋の仕事りや日よけなどにする。
有明の月——夜が明けても空に残っている月。
葡萄染の固紋——着物の色と模様の種類。
指貫——裾を紐で指し貫いて絞れるようにした男性用の袴。
直衣——男性貴族が着用した平常服。
単衣——裏地のない着物。
しどけなく——くつろいだ様子で。乱雑に。
遣水——庭の中に水を引き入れて作った流れ。
宿直——夜間、宮中や役所などに仕事で泊まり込むこと。

識のやりとりをしていたという推測である。

これには、あながち推測ばかりではないと思わせる要素もある。一つには、第二八三段が『枕草子』の中でも特に物語めいた随想的章段であることだ。『源氏物語』に触発されて着想したと言えはしないか。また一つには、この段が自然と人とを対比させ、雪と月光が白一色であるのに対して登場人物たちは彩り豊かな装束を着込んでいること、自然の無彩色の中でそんな装束がひときわ鮮やかに映える美しさを示していることである。実は『源氏物語』『朝顔』巻の場面、先に述べた光源氏による批判のくだりの続きにも、同じ色の対比がある。月光輝く雪の庭に下りて、雪玉遊びに興じる童女たちの描写である。

月は隈なくさし出でて、一つ色に見えわたされたるに、萎れたる前栽の陰心苦しう、遣水もいいたうむせびて、池の水もえも言はずすごきに、童べ下ろして、雪まろばしせさせ給ふ。をかしげなる姿、頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまざまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなうあまれる髪の毛、白きにはましてもてはやしたる、いとけざやかなり。（月はくまなく輝きどこもかしこも光一色で、雪に枝をたわませた植え込みの姿は痛ましく、遣水も滞って音を立て、池の水も何とも言えず荒涼とした風情をたたえている。光源氏様は、そんな庭の中に童女たちを下ろし、雪玉作りをおさせになる。かわいらしげな背恰好の童女たちは、子どもらしい髪形が月に映える。いっぽう大人びて馴れた童女たちは、色とりどりの童装束を乱れ着て帯をしどけなく結び、まるで寝乱れたように着崩した姿が若々しいうえ、装束の裾から長々とこぼれ出た髪の毛の裾が、白い世界にひと際ひきたてられて鮮やかだ）

（『源氏物語』『朝顔』

〔問１〕⁽¹⁾ 紫式部はこの章段を見落としていたのだろうか。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア『枕草子』に月夜の雪景色の美しさを述べた章段があることにはあえて触れず、『源氏物語』では紫式部の強い対抗心から、清少納言を責める目的で痛烈に批判しているから。

イ『枕草子』に月夜の雪景色の美しさを述べた章段があることに気付かないまま、紫式部は『枕草子』に清少納言のセンスの底の浅さが見られると、安易に批判しているから。

ウ『枕草子』に月夜の雪景色の美しさを述べた章段があることを承知しながら、紫式部はあえて無視を決め込んで、清少納言を不当に批判しているから。

エ『枕草子』に月夜の雪景色の美しさを述べた章段があるにもかかわらず、『源氏物語』では雪と月の不似合いを指摘している記述だけに触れて、清少納言を一方向的に批判しているから。

〔問2〕⁽ⁱ⁾ばかり、推測⁽ⁱⁱ⁾について次の①、②に答えよ。

① ばかりとあるが、これと同じ意味・用法のものを、次の各文の――を付けた「ばかり」のうちから選べ。

ア 今できあがったばかりの作品を提出する。

イ 五年ばかり前のできごとだ。

ウ 結果ばかりを気にしてはいけない。

エ とび上がらんばかりに喜んだ。

② 推測⁽ⁱⁱ⁾とあるが、この熟語と同じ構成のものを、本文中の波線部アからエのうちから選べ。

ア 批判

イ 大胆

ウ 早計

エ 公表

〔問3〕⁽²⁾清少納言はそれを読み、なるほど納得して『枕草子』第二八

三段を書いた。とあるが、「なるほどと納得」したとはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「師走の月夜」は趣深いものだと思っていたが、光源氏による批判の言葉を読んで、やはり優雅な風景だと理解したということ。

イ 雪と月との組み合わせは調和しないと思っていたが、『源氏物語』「朝顔」巻を読んで、実は美しいものだと思えたということ。

ウ 白一色の世界は美しさに欠けると思っていたが、光源氏による批判の言葉を読んで、自然と人事の対比の妙を理解したということ。

エ 月夜の雪景色は寒々しいものだと思っていたが、『源氏物語』「朝顔」巻を読んで、厳寒を強調した冬の美しさを理解したということ。

〔問4〕⁽³⁾実は『源氏物語』「朝顔」巻の場面、先に述べた光源氏による

批判のくだりの続きにも、同じ色の対比がある。とあるが、「光源氏による批判」に相当する部分を、本文の『源氏物語』の引用部分から二十字以内でそのまま抜き出して書け。

〔問5〕⁽⁴⁾ I、IIに入る適切な語句を、それぞれ本文中より抜き出して書け。なお、Iには四字の語句が、IIには漢

字三字の語句が入るものとする。

〔問6〕⁽⁴⁾ その考えは、二人の才女と二つの作品の関係について、これまでにない新しい見方を拓くことだろう。とあるが、「これまでに

ない新しい見方」とはどういうものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 相手より優れた作品を書いているという自負心を持つことが、誰も知らなかった新しい美の発見につながったという見方。

イ 共通する自然観を基盤として作品が作られることによって、二つの才能が同時代に存在することができたという見方。

ウ それぞれの作品が影響を与えて高め合っており、才能のある二人の間には感性の相互交流があったという見方。

エ 互いに相手の批判を素直に受け入れながら、自己の作品の完成度を極限まで高めようとしていたという見方。